

# 国際交流基金助成事業報告書

薬学部 4年次生 藤本 百合香

2017年2月26日(日)から3月10日(金)の16日間、オーストラリアのニューサウスウェールズ州キングスクリフにて薬学語学研修を行いました。

## 1. 現地研修校 North Coast TAFE Kingscliff Campus

TAFEとはオーストラリアに100校以上ある州立の高等職業訓練専門学校です。留学生を対象とした様々な専門コース、英語コースが開講されていました。最初に校内を案内していただいたときには、調理場、自動車整備施設、医療施設、美容師のスキルを学ぶ施設、マッサージ室(理学療法)、コンピューターのプログラム、デザインアートなど様々な教室を見せていただき、そのレベルの高さに圧倒されました。大学を理論を学ぶ場とするな、TAFEは実践的なことを学べる場所です。図書館やカフェ、コンピュータ室なども充実しており、勉強に集中できる環境が整えられていました。お昼には様々な専門分野を学んでいる生徒たちが広いキャンパスのベンチでご飯を食べていました。3月のオーストラリアは比較的真夏よりは涼しく過ごしやすい気候であったため、私たち留学生もお昼は外で食べるようにしていました。毎日様々な学生と出会うことができるため、どこ出身か、何を学んでいるのかを聞きあつてコミュニケーションをとったりもしました。薬学以外の授業の内容が聞けるのでとても興味深かったです。最初は話しかけるのにためらいがあったり、会話が続くかを考えたりでなかなか踏み出せませんでしたが、だんだん英語を使つての会話が楽しくなり、最初の頃とは違って会話自体を楽しめるようになったのはとても大きな進歩だったと思います。



写真1. アートデザインを学んでいる生徒と記念写真

## 2. 授業内容

月～金の朝 9 時から午後 4 時頃まで TAFE で授業を受けました。午前中は英語、午後は薬学の授業がありました。

英語の授業は英会話が中心で、スピーキング、リーディング、発音などをオーストラリアという国に関連した内容で授業してくださいました。テキストをコピーしたものを配布資料として渡して下さったり、オーストラリアの生き物の写真を見せて下さったり、動画を用いたり、私たちが興味深く学習できるような工夫が多くあり、この授業がとても楽しみでした。英語の学力別に分かれたクラスではなかったのも物足りないと思う方もいるかもしれませんが、この授業では人と会話する楽しさ、言語を超えたつながりが気持ちさえあればいくらでも持てるということ、私の知らない世界がまだまだあるということに気づかされ、英語の文法といった硬い知識ではなくもっと大切な英語本来の楽しさを学ぶことができました。先生が普段受け持っている英語クラスの生徒との交流授業もあり、様々な国の人が TAFE で英語を学んでいることを知りました。私が実際に話したのはロシア、サウジアラビア、ブラジル出身の生徒です。全員に共通しているのはみな自分の国が大好きで、誇りを持っているという点でした。「やあ、初めまして。僕の国はとってもいいところなんだ！」英語がうまくなくても、生き生きとした表情で自分の国について語っているのを聞いていると、不思議とこちらも笑顔でとても楽しく聞けるのです。日本だとどこか遠慮してしまい、さらに自分の国について実は全然知らないということ気付かされました。いざ話そうとすると出てこない、そんな歯がゆい思いをたくさんし、自分の無知さに驚きました。相手を知る前にまずは自分のことを知っておかなければ、それは会話する中で最も基本的なことだと痛感させられました。



写真 2. 英語教員の Liz 先生

英語で薬学を学ぶと聞いたときは、本当に理解できるのだろうかという不安が強くありました。不安一杯で臨んだ授業でしたが、現地の薬学の先生はとても熱心で、何度も分かるまで説明して下さり、薬学におけるオーストラリアと日本との違いを学ぶことができました。一番大きな違いはやはり、薬剤師の立ち位置です。日本では医師の処方箋通りに調剤するイメージが強く、大半の決定権は医師が持っていますが、オーストラリアでは医師と薬剤師が並ぶぐらいにどちらもとても大切なのだそうです。そのことは薬局で予防接種が受けられること、一つの処方箋で何度も薬がもらえるリフィル処方箋があることなどからもうかがえます。リフィル処方箋とは、一度処方してもらったら次回からは医療機関を受

診することなく薬を調剤してもらうことができる処方箋です。このとき薬剤師が患者さんのカウンセリングを通してこのままの処方でのよいかを判断する必要があるため、薬の知識が問われてきます。また調剤を行うテクニシャンがいるため、薬剤師は調剤以外のこと、患者さんのケアや医師との連携に力を入れることができます。このような医療体制から、同じ薬剤師でもまた違った立ち位置になってくるのだなと感じました。薬剤師は薬のプロなのだから、薬に関する服薬指導はもちろん、薬物動態、どの薬が適するのかが薬剤師にすべて任せるといった明確な分担は日本も見習うべきだと私は思いました。医師にまかせるのではなく、薬に対するプロ意識をもって医師と対等に議論できるような、そんな薬剤師を目指したいと思います。医療体制が国によってここまで違うことは、この留学に参加するまで知りえなかったことであり、オーストラリアでの薬学の授業は将来なるべき薬剤師像について考えるきっかけを多く与えてくれました。

### 3. 薬局見学

薬学の授業の中で薬局見学に行かせていただきました。見学させていただいたのは **United Chemist** と **Amcal chempro Chemist** の2つの薬局です。先生が作ってくださった冊子を手には、薬局の人と会話し、穴あきになっている薬局の情報を埋めていきました。冊子に印刷されている薬を探し出す課題がとても難しかったです。日本は第一類医薬品、第二類医薬品、第三類医薬品の分類が箱に記載されていますが、オーストラリアの場合分類数は10にまでのぼり、数字ではなく、**pharmacy medicine**(日本でいう第二類医薬品)、**pharmacist only medicine**(第一類医薬品)というように言葉で記載されていたのが印象的でした。また薬局で働く人も **Dispensary assistant** や **Pharmacy assistant** といった薬剤師のアシスタントを行ってくれる人がほとんどを占め、薬剤師は1人、2人いれば十分といった感じでした。日本ではアシスタントといった存在はいないため、このような体制にとっても驚きました。海外でも分包は有効に活用されており、プラスチックケースの色でどういった薬なのかさらに分類がおこなわれていました。また、処方箋が日本では有効期間がたった4日に対してオーストラリアでは1年間有効であることにも驚きました。違う点が多く、日本ではどうなの？といった返しが必ず来るため、どう説明しようかとみんなで辞書を片手にし、必死に説明したことがとても心に残っています。見るものすべてが新しく、とても興味深い見学となりました。機会があれば病院の見学にも行ってみたいと思いました。



プラスチックケースを用いた分包(写真左)



薬剤師さんの話を伺っている様子(写真右)



見学させていただいた薬局の前で

#### 4. ホームステイ

滞在先はノースサウスウェールズ州の Pottsville という町にある、静かな住宅地でした。7人家族で、猫、ラット、うさぎを飼っているととてもにぎやかな家庭で、私をととても暖かく迎え入れてくださいました。私に対して話すときはゆっくり話しかけてくださるのでまだ聞き取りやすかったのですが、食卓での会話についていくのがとても難しかったです。やはり話すスピードはこれが普通なのだろうと感じ、まだまだリスニング力が足りないことを実感させられました。ホームステイをしていて一番驚いたことはオーストラリア人は寝るのがとても早いということです。21時にはみんな寝る用意をし始め、22時には家族全員が寝静まっていました。日本では23時まで起きているのは当たり前のことだったのでこの習慣には驚くと同時に感心させられました。オーストラリアの家は平屋がほとんどで、ペットを飼っている家庭が多いです。私のところにはラットがいたので、真っ先にラットがいても大丈夫かと聞かれました。このラットもお金で買ったのではなくいつのまにか住み着いていたラットをそのまま飼っていると聞き、オーストラリアの人のおおらかさに思わずくすりと笑ってしまいました。私のホームステイ先は

お母さんがイギリス人、お父さんがニュージーランド人でした。晩御飯はお父さんが腕をふるってニュージーランドのポテト料理を作ってくださいました。日本では料理を作るのはお母さんの仕事という概念がいまだに残っているため、そのことを話すと、「料理は得意な方がすればいいのよ、男女は関係ないわ」と笑っておっしゃっていました。その瞬間日本人はなぜこんなにもとらわれて生きているのだろうと感じずにはいられませんでした。私は海外の人のこういった陽気さがとても好きです。日本語に変換してみるとたいした会話ではないのですが、それでも自分の伝えたいことが相手に伝わると楽しい、不安で話せなくなってしまうのが一番もったいないと今では感じるようになりました。ホームステイをする前は初めてだったため、こんな時はどう言おう、英語の文章はおかしくないか、どうやって会話しよう、そんなことばかり考えていました。きっと初めての人はみんなそうだと思います。でも今ならそんな必要はないと声を大にして言いたいです。英語を話したいという思いが何よりも大切で、それはホームステイとして受け入れてくださる方にも伝わります。実際に生活してみないと気付かないことがたくさんありましたし、ぜひ自分の経験から感じてほしいと思いました。



お世話になったホームマザーの Vicki

## 5. まとめ

留学に行く前と、行った後に、近畿ツーリストさんがおこなう自己診断テストを受けました。診断テスト自体は同じ質問なのに、自分でも驚く程考え方が変わっていました。留学で新しい自分に出会うことができました。今まで留学と聞くと、なんとなく不安でなかなか踏み出せなかったのですが、今回行ってみて本当に良かったと思っています。海外の医療体制には以前から興味をもっていたので、実際に薬局を見学したり授業を受けたりすることができたのは、本当に貴重な経験でした。日本だけに留まらず、世界へと視野を広げることができましたし、英語に対しての考え方も変わりました。英語は長文読解や文法問題のイメージが強く、英会話を楽しむといった気持ちはいつのまにか忘れていたことに気づきました。英語を話す、海外の人と意見交換を行うことはこんなに楽しかったのかと気づかされ、もっと早くに行っていればと思うほどに大切な経験と思い出になりました。来年から就職活動が始まりますが、なんとか英語を活かせないかと考えています。海外と日本では薬剤師に関しての違いがあまりにも多く、日本の医療体制は遅れているように感じました。薬剤師の存在意義が問われている今こそ、薬剤

師として出来ることはなにか、医師の処方箋通りに調剤するだけでいいのか、自問自答していく必要があると感じました。また、海外の人と意見交換を行う際、伝えたい言葉がすぐに出てこず、歯がゆい思いを何度もしたのもっと英語を勉強しなければと思い、英会話の授業や TOEIC の勉強にも積極的に取り組んでいます。この留学で英語に対する姿勢が大きく変わり、将来の薬剤師像に対しても課題を見つけることができました。少しでも興味のある方がいればぜひ、留学することをお勧めします。今までに知り得なかった世界が広がっており、自分自身を成長させる機会として最適です。この報告書が 1 歩踏み出すきっかけとなれば幸いです。